

入学者選抜の現状と課題

なかしま ひでき
中島 秀喜^{1,2}

まつい ひろあき
松井 宏晃^{1,3}

はじめに

本学は昭和46年に「キリスト教の人類愛に基づいた生命の尊厳」を医学教育理念として創設された単科の私立医科大学である。昨年(平成18年)10月に開学35周年を迎え、ハードの面では、新教育棟、エネルギー供給センター、本学の母体でもあり診療教育の場であった東横病院の改築などが行われている。そしてソフトの面では、平成14年度入学生よりモデル・コアカリキュラムを基本とした6年一貫の新カリキュラム編成を行ってきている。それに伴い、入学試験選抜制度も、本学が目指す医学教育理念・目標に適した学生を公平かつ妥当と考えられる方法を模索しながら改革してきている。今回、聖マリアンナ医科大学雑誌の特集企画「医学教育：卒前・卒後教育の現状と課題」にあたり、本学における入試方法の変遷と、現在われわれが抱えている問題点について述べてみる。

入試委員会

入試業務に関しては、本学の常置委員会の一つである入試委員会の指導で年間のスケジュールが決定され、進められていく。委員会は、本学専任教授7名で構成される。入試問題や実施方法に直接関係する審議を行うために、他の委員会とは異なり教授のみで構成されていることは、いかにこの委員会が重要な役割をもっているかということの表れであろう。他に事務担当として、教育課の職員が参加するが、事務的な報告事項などに限っての出席である。

入試委員会が担当する審議および業務は、その年度の入学試験(推薦入試、一般入試)や合格発表の日

程、試験の実施方法、試験会場の選定、入試要項の作成、問題出題者への作成依頼、学内での進学相談会、指定校を中心とした高校訪問、推薦入試で行われる適性試験や面接試験で使用する課題の作成、小論文の実施方法の検討およびその作成、出題者と合同での問題校正、試験監督者および面接委員との打ち合わせなど多岐にわたる。中でも、試験問題に関することや面接の課題などに関わる審議は、事務職員は退席し、出題者と委員のみで検討し、極秘性が要求されることから、途中経過の書類はすべてシュレッダーで廃棄した後、その時点の最終稿のみを金庫保管して会議を続けることになる。それゆえ、議事録として残しておくことができないため、委員相互の記憶を確かめながら、粛々と審議が進められていく。ここでもう一つ特筆しておきたいことは、入試委員会の業務は明確なデッドラインが決められており、それを厳守しなければいけないということである。他の委員会では、意見がまとまらなかったり、委員の出席が悪くて審議が次回に持ち越しというようなこともあろうが、入試委員会にはそれが認められない。試験前日までに試験問題の完成は当然のこと、試験会場の設営、監督者、面接者の配置などが完璧になされていなければならない。審議が遅れたから、入試日程や合格発表を遅らせるということは許されないのである。そのために、入試委員には委員会の欠席は認められない。また、例年11月下旬に推薦入試、1月下旬に一般入試一次試験、2月初旬に二次試験が実施されるが、試験前日から会場の設営、試験当日には問題の搬入、試験監督の総括、解答用紙の回収・製本作業の監督と保管。翌日からの採点、集計業務の監督、判定資料の作成、合格者判定会議と、わずか数日の間に膨大な業務を分刻みでこなし、それが深夜遅くまでおよぶこともある。その間、厳正・公平な判定が行われるように、入試委員はほぼ連日これらの業務に携わる

1 聖マリアンナ医科大学 入試委員会

2 聖マリアンナ医科大学 微生物学

3 聖マリアンナ医科大学 大学院アイソトープ研究施設

のであるが、加えて大学教員としての診療や教育も同時に行っているわけであり、かなりの激務がしいられる。

学生募集方法

学生の募集方法は、募集要項、大学案内パンフレット、大学ホームページ、学内進学相談会、企業が企画する学外進学相談会、雑誌・媒体紙等により紹介しており、多くの受験生が本学の特色や教育内容を理解しやすいよう工夫している。平成16年度からは、入試委員と教育担当の事務員が本学の推薦入試指定校を中心とした高等学校を訪問し、進学指導教諭と直接に面談することを行っている。入試委員一人あたり3~5校を訪問し、この3年間で約100校を訪問した。

入学者選抜方法

〈一般入試〉

昭和46年の開学時から、一次試験として本学独自に作成した試験問題(数学、英語(平成17年度までは英語、独語、仏語から1科目を選択)、理科(物理、化学、生物から2科目を選択)による個別学力試験を行ってきた。昭和63年から平成13年度まで、大学既卒者を入学定員の範囲外で第2学年に編入学させていたが、平成14年度より新カリキュラム導入に伴い募集を停止している。一次試験合格者に対して、二次試験として適性試験、小論文、個人面接およびグループ討論を行っている。小論文は、平成17年度までは資料文を読み、その要約と自分の考え方を述べる形式であったが、平成18年度以後は、資料文の表題を書かせたり、著者の意図を述べさせたり、空所補充などの問題を採用した。これは、客観的な文章の把握力や語彙力、文章作成能力を評価する目的で行っている。本学の入学試験では、将来医師となる者に必要と思われる、幅広い教養と感情性豊かな人間性、深い洞察力、倫理性、生命の尊厳についての深い認識などを考慮し、複数回の個人面接やグループ討論を通してその能力を評価している。これらの小論文、面接評価を点数化して、学力試験成績に加味することで、総合的な視点から合否を決定している。

一般入試の募集人数は、入学定員を推薦入試と合わせて100名としているために従来80名であったが、平成18年以後は85名である。

〈推薦入試〉

昭和59年度からは、本学の建学の精神を理解し、その趣旨を広く社会に活かせる学生を採用するために推薦入試(定員20名、平成18年度からは15名)を導入し、幅広い能力と医学生としての適性・素質、豊かな人間性と強い目的意識を持った学生の選抜を行うこととした。推薦入試では指定校推薦制度を取り、個別学力試験は行わず、高等学校の成績を評価し、2日間の日程で小論文・適性試験Ⅰ・Ⅱおよび面接Ⅰ・Ⅱ(個人面接)、面接Ⅲ(グループ討論)を実施し、総合的な視点から合否を決定している。特に、適性試験Ⅱは本学独自のユニークな試験方法であり、約60分の本学教員による講義を聴講し、その内容に関する正誤・空所補充方式による設問に答えさせるもので、理解力や記憶力、判断力を評価する目的で行っている。さらに、面接Ⅰでは、適性試験Ⅱで聴講した内容に関する質問を行うことで、理解力に加えて表現力、構成力などを評価する。グループ討論は、与えられた課題についての問題解決能力や協調性、リーダーシップなどを評価する目的で行っている。これらの適性試験、面接試験および小論文の評価は、すべて点数化して合否の判定を行っている。

今後の課題

18才人口の減少により受験者数は確実に減少してきており、中教審の試算では平成19年度には大学全入時代が到来するとのことであった¹⁾。しかしながら、資格専門学部、生命に関わるライフサイエンス学部としての医学部の人気は依然高まるばかりである。本学の受験志願者数の推移(図1a)を見ても、多少の高低はあるものの、この15年間は高い受験者数をキープしている。特に、平成19年度の志願者は2,380名と開学以来最高の数を記録した。この理由としては、試験会場を都内(五反田TOCビル)として、他大学との試験日が重ならないように配慮したことがあげられよう。加えて、学内進学相談会や高校訪問を通じて、受験生や進学指導の教師と直接面談し、本学の特色、教育カリキュラムの特徴などを知ってもらおう努力を重ねてきたことも影響していると思われる。学内進学相談会への参加者は年々増加してきており、特に夏季休業中に開催する相談会には毎回100名以上の参加がある。それゆえ、一昨年度から7、8月の相談会を増やし

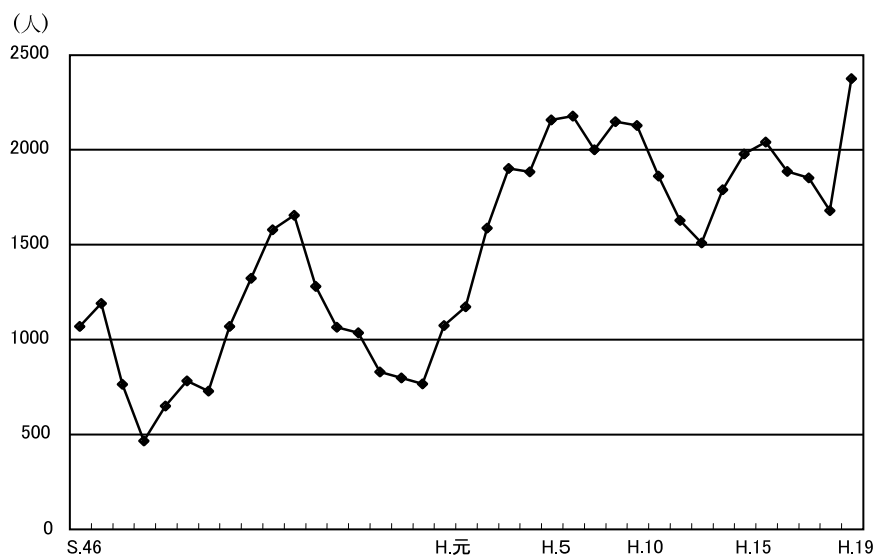


図 1a 本学一般入学試験志願者数の推移

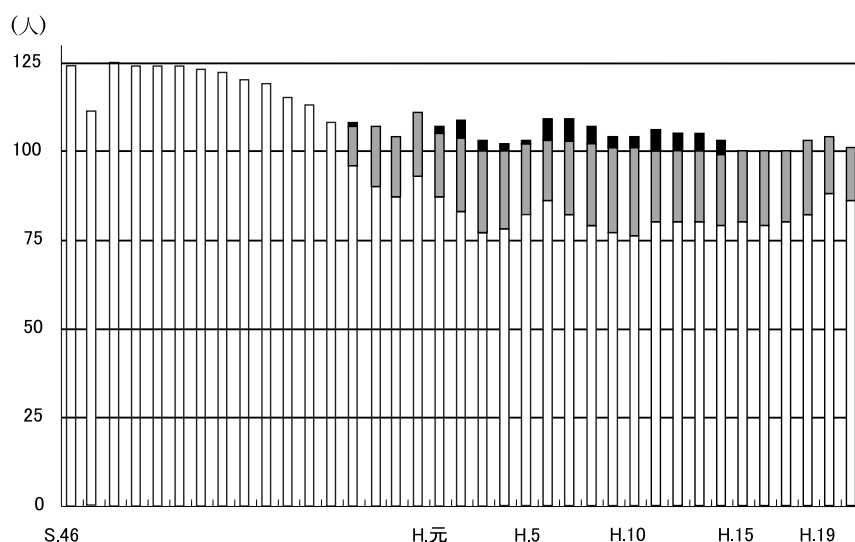


図 1b 入学者数の推移

□ 一般入試での入学者, ■ 推薦入試での入学者, ■ 編入学者

て毎月2回の計4回とした。この時の相談会には、本学教員による模擬講義も行われ、本学の教育内容の一環を知ってもらうという意味でも受験志願者には好評と思われる。また、高校訪問で直に高校の進学指導教諭と面談することは、本学に対する理解を深めてもらうだけでなく、高校側、受験生側の要望を把握して、本学の入試の改善を行う役割もなしていると考えられる。今後もこのような地道な努力を続けながら、より良い選抜方法を模索していきたい。

平成16年度に行った本学の自己点検・評価報告

に対して、平成17年4月に大学基準協会から正会員への加盟・登録が認定された²⁾。その認定理由の中に、「多様性のある入試を行って、適性のある学生を入学させようと努力している」とある。また、平成14年度から従来実施していた入学定員外での編入学を停止し、入学者を定員通りに受け入れていることが評価されている。しかし、平成17, 18, 19年度の3年間は、入学者数がそれぞれ103名、104名、101名であり(図1b)、今後は定員を厳守し、在籍学生数の是正に努力する必要がある。

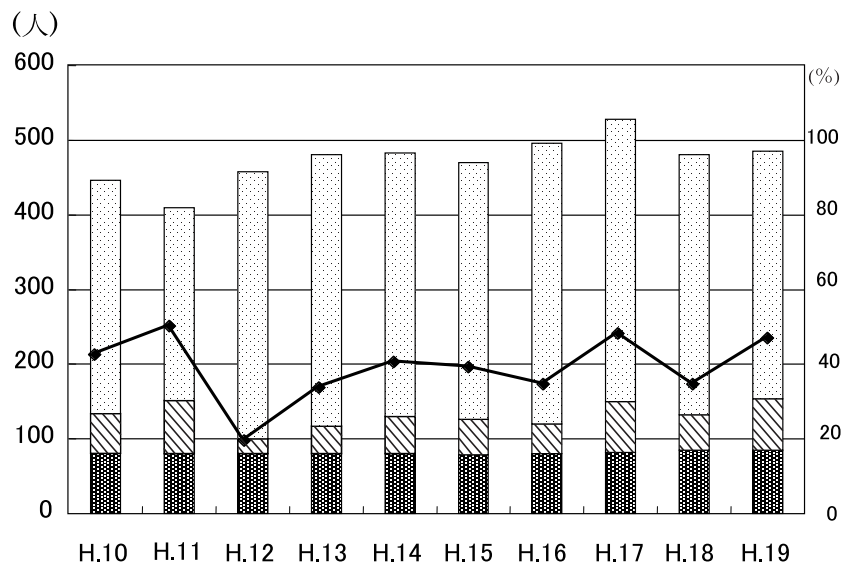


図2 一般入試合格者数と入学辞退率の推移

■ 正規合格者数, ▨ 追加合格者数, □ 二次試験不合格者数
 ◆ 入学辞退率; 入学辞退者 / (正規合格者数 + 追加合格者数)

平成17年度の入学試験から、一般入試不合格者のうち本人からの申請があった場合には、学力試験科目の個人得点、全受験生の平均点および合格最低点(ボーダー点)、最高点を開示している。この合格者のボーダー点は年々確実にアップしてきており、今年度の状況をみているとボーダー点は63%以上となっている。合格するためには高い学力が要求される状況は、本学を含め昭和50年代に新設された他の私立医科大学も同様で、どの大学の難易度にも大きな差異がなく横一線の様相を呈してきていると思われる。図2には、平成10年度以後の一次試験合格者数と二次試験正規合格者数、追加合格者数および入学辞退率の推移を示している。最近10年間では一次試験の合格者は400~500名程度であり、二次試験合格者として平成10~14年度は80名、15年度79名、16年度80名、17年度82名、18および19年度は85名を発表した。各年度とも入学辞退者が発生しており、正規合格と追加合格者合わせて入学辞退者が例年20~70名みられる。全入学辞退者を、発表した正規合格者と追加合格者数の合計で除したものが図2の折れ線グラフであり、20%~50%の間で推移している。受験志願者の心理として、より偏差値の高い、いわゆる有名大学への入学を希望することは当然のことである。しかしながら、先にも述べたごとく受験生の医学部人気は高く、いく

つかの受験予備校が調査している本学の難易度もここ数年確実に高くなってきている³⁾。以前は有名大学のすべり止めとして私立医科大学を受験するというような風潮があったが、昨今では第一希望として本学を受験してくる志願者も多くなってきたと思われる。このような現状の中で、本学への入学志向性が強く、より優秀な学生をいかに選抜していくのか、学力試験のみならず、二次試験の面接や小論文で見極めていくことも大切であろう。

小論文に関しては、従来は資料文を読ませ、その要旨と受験生の考えを述べさせる形式のものが続いていた。しかしながら、この形式では小論文を実施することの目的である、物事に対して論理的、客観的な理解ができるかどうか、的確な判断能力を有しているか、ということの正確な評価ができないのではないかと反省から、平成18年度からは小論文作成検討委員会を入試委員会の下部組織として設置し、試験方法や問題作成を行うことにした。それにより、文章の分析能力、思考能力、語彙力、さらに文章構成力や表現力を判断する形式を採用した。今後も、この委員会が継続してより良い、本学の入学選抜に有用な小論文問題を作成していくことを期待している。

医学教育の主要な目的は、「優れた医師を育成すること」である。優れた医師の資質としては、1971

年に実施された Price らの報告によると次に示すような項目があげられている。すなわち、患者を徹底的に調べる知識と能力、専門領域の最新の知識を取得すること、問題の核心を賢明に思慮深く把握する能力、良い臨床的判断力、他医との協調性などである^{4,5)}。また、どのような能力・資質を有する学生が医学生として望ましいかという調査も多数の研究者や研究施設で行われており、大学入試センター研究開発部で行われた「医学部・医科大学の入試のあり方に関する調査研究」でも述べられている。⁶⁾ これらの報告では、学力試験だけでは測れない医療者としての適性を判断するために面接試験や、小論文、調査書の重要性を述べたものが散見される。本学においても、推薦入試はもちろんのこと、一般入試にあっても複数回の面接試験を実施している。本学のカリキュラムの使命と考える「良き臨床医の育成」のために、本学が望む学生像として次の6項目を挙げている(表1)。すなわち、① 素直さ、謙虚さ、② 社会性(社会的良識)、協調性(調和・和合)、③ 医学生としての意欲・目標、④ 自己学習能力、⑤ 問題を見つけ出す能力、⑥ 問題を解決する能力を有することである。学力試験問題や小論文に関してもこの点を考慮して作成しているわけであるが、推薦入試や一般入試の面接試験においては特にこの点を重要視している。そのため、面接担当者を対象とした講習会や説明会を開催している。また、面接時には確認すべき評価項目を提示した評価用紙や複数の受験者を面接した時の面接者自身の評価がどのような分布になっているのかを知るためのチェックシートなどを配布し、より客観的で適切な評価が行われるように努めている。しかしながら、現在の面接試験方法や課題が最適なものと断言することは出来ず、今後も本学が望む学生像によりふさわしい入学選抜に役立つような面接試験を取り入れていくように検討を続ける必要がある。

以上述べたように、本学では医師としての資質を

表1 本学が望む学生像

① 素直さ、謙虚さがある
② 社会性(社会的良識)、協調性(調和・和合)を持つ
③ 医学生としての意欲・目標を持つ
④ 自己学習能力がある
⑤ 問題を見つけ出す能力がある
⑥ 問題を解決する能力がある

備えた「良医の卵」を選抜するために、学力試験、小論文、複数の面接試験を行っているが、入学選抜の成績と入学後の学内成績や医師国家試験の可否、さらには卒後の医師としての活動などとの関連については継続して検討していく必要がある。様々な選抜方法の改善により、どのような効果が上がったのかを入学者の動向から調査・分析を行い、その結果をさらなる改善に役立てていくことが重要である。

引用文献

- 1) 私立医歯学部受験攻略ガイド, メルリックス学院, 東京, 2006.
- 2) 聖マリアンナ医科大学自己点検・評価報告書および加盟判定審査結果,
<http://www.marianna-u.ac.jp/tenken/index.htm>
- 3) 入試に勝つ～2007年度版 展望と対策～, 毎日新聞社, 東京, 2006.
- 4) Price, P. B. et al. Attributes of good practicing physicians, J. Med. Ed, 1971; 46: 229-235.
- 5) 中側米三. よい医師像. 医学教育 1977; 8: 97-100.
- 6) 平成15～17年度 共同研究「総合試験問題の分析的研究」研究班: 医学部・医科大学の医学科における入試のあり方に関する調査報告書, 独立行政法人 大学入試センター研究開発部, 東京, 2005.